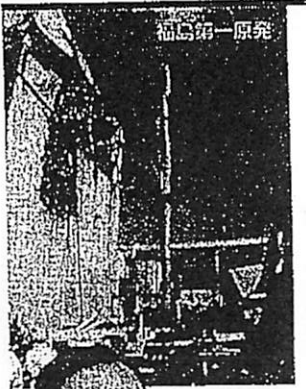


福島第一原発



再稼働原発がテロに 制圧される日



吉田昌郎前所長

伊藤 祐靖 (元海上自衛隊特別警備隊先任小隊長)
真剣さぐが欠如したテロ対策。
その盲点を暴く



志賀原発での対テロ訓練

「原子力発電所(原発)の安全対策」

その言葉を聞かない日はない。全国で停止した原発を巡る、政府と地方自治体の交渉についてのニュースの中で、その言葉が毎日のように飛び交っている。

昨年の東日本大震災の直後に発生した、福島第一原子力発電所の事故と、それに伴う放射能汚染が、いかに日本国民の中に恐怖として深く刻み込まれているかをあらためて思い知らされる。そんな原発の安全を巡るニュースの

際使用されている。にもかかわらず、なぜ「原発テロ対策」を真剣に考えないのか。

私は、十二年前、自衛隊で初めての特殊部隊——海上自衛隊の「特別警備隊」の創設に携わった。一九九九年の能登半島沖事案(北朝鮮工作船侵入事件)を契機に創設された防衛省初の特種部隊だ。その後、八年間、世界レベルまで強化する努力を続けてきた。また、同隊の即応部隊を率いる先任小隊長として、死地に赴くことを常に覚悟してきた。その中で、世界の特殊部隊とも交流し、様々な戦術を研究、訓練してきた。

その経験から、現在の日本の「原発テロ対策」に極めて深刻な危惧を抱いている。

結論から言えば、日本は「原発防護」のシステムどころか、その思想すら持ち合わせていない。

本稿の目的は、いたずらに危機を煽ることではない。私の特殊部隊での経験が、今後の「原発テロ対策」に変化

中で、聞き慣れないフレーズをずっと耳にしてきた。

「ストレステスト」。原発の再稼働を地方自治体に求めるため、政府が「チェックリスト」を提示し、「これが守られているから安全だ」と必死の説得を続けている。

しかし、私は、その「ストレステスト」の中身を知って、今、愕然としている。

項目の中には、津波や自然災害への対策のみで、「原発テロ対策」というを与えること、少しでも日本の安全に繋がることを願ってこれを記すものもある。

「原発テロ対策」がなされていない真の理由は余りにも根深いところにある。なぜなら、「原発テロ対策」のみならず、言われて久しい日本の「危機管理」への思考が、根本的に、いや絶望的に間違っているからだ。

私が言いたいことは一つである。〈今こそ、いや、そろそろ、真剣に日本の安全を考えるべきだ〉

「陽動作戦」に備えよ

前述した「絶望的に」という言葉は、読者の目を引くためにわざと用いたオーバーな言葉では決してない。

具体例は、多くの方が目にされたであろう、あるシーンをもって簡単に説明することができる。

東日本大震災以降、「原発テロ対策」の一環として、行政、電力会社、警察などによる訓練がなされている。

項目が一切、存在しないからだ。

原発の安全を考えるなら、相手がなんであれ、安全を保ち、周辺住民を安心させ、施設を保護するべきである。

つまり相手が、津波であろうが、地震であろうが、火災であろうが、テロリストであろうが、あらゆるものから守らなくてはならない。だから、テロリストへの対策だけを行わないのは理論的におかしいのだ。

しかも、今や、行政や政治の場でも、「原発テロ対策」という言葉が頻りに使われる。ほとんどのシナリオは、数人の「潜入者」が乗った車が、原発の正面ゲートを突破して突入。それを取り押さえ、訓練は終わり。対策本部では、あらかじめ座って待機していたスタッフが準備された連絡網によって、シナリオどおりに調整を行う。

はっきり言おう。今、行っている訓練からステップアップがなされないのなら、何の意味もない。原発を攻撃する「潜入者」に、そんな者は絶対ではないからだ。

「潜入者」は、事前の偵察により、情報をとり、原発のどこを攻撃すれば、いかなるダメージを加えることができるか、それを必ず把握し、潜入、攻撃してくるのだ。

そもそも原発テロを起こす「潜入者」について、電力会社も政府もほとんど現実的なイメージを持ち得ていない。また、いかなる技術、技能、装備を持って、どんな戦術を使うのか、さらに目的はどのようなものか考えられるのか——それらについての思考は皆

再稼働原発がテロに制圧される日

無に等しい。

「潜入者」が行う「原発テロ」の目的として想定すべきは、原発そのものの破壊もさることながら、陽動作戦の一つとして利用される可能性だ。つまり国内を混乱させて、主目的のターゲットを攻撃しやすくするために原発を利用するのである。

「原発テロ」が起これば、警察の特殊部隊であるS A Tや自衛隊の投入を求める声が出るだろう。たとえばそういった精鋭部隊をちらしておいて、主目的の首相官邸を攻撃する作戦も考えられる。

またテロリストによる金銭目的の脅迫も想定しなければならぬ。

冷却用や送電の電源システムを襲うと脅迫する。すぐに警備が強化されるが、何も起きない。警備強化は個人負担を大きくし、個人負担の増加は疲弊につながる。そして、それは緊張感の欠如へと直結する。テロリストたちはその時を悠々と待っている。つまり時の利を利用するのである。

「者」は、必ず山や水を利用して自然を味方にして荒天時を狙う。

実践的訓練三つのポイント

もし、今すぐに行える訓練があるかと質問されれば、次のことを提案したい。我々のような特殊部隊経験者が偵察し、攻撃計画を立て、実際に攻撃をする(無論、破壊行動はしない)。すると、三つのポイントが見えてくる。

- ①防護計画の問題点
- ②防護員の能力の欠落点
- ③防護装備品の不適格点

偵察というのは、どこに監視カメラやセンサーがあるのか、を見ることではない。

なぜ、そこに監視カメラが設置してあるのかを考へることだ。なぜここに赤外線を置いたのかを考へれば、施設管理者、警備会社の警備ポリシーと防護計画が見えてくる。何を予想し、何を嫌がっているのがわかってくる。センサーの位置という枝葉から「防

「原発テロ」を計画する「潜入者」は、特殊部隊の軍人のように自分の任務を命より優先し、国家的な教育・訓練によってその精神が植え付けられているであろう。

全国で行われている訓練には、そうした相手に対処するための戦術的な思考がまったく欠如している。

例えば、セキュリティフェンスのすぐ外側で、女性に対するワイセツ事件が発生したら、内部の警備員は敷地から飛び出し、女性を助けようとするだろう。警備員たちの意識はそこに集まる。

だが、この時点で、防護のすべてが終わる。

これが日本のセキュリティの最大の弱点の一つだ。つまり、日本のセキュリティには、陽動に対応する、という思考が欠如しているのである。

心しておくべきは、「原発テロ」を行う「潜入者」は、陽動を作戦に用いないわけがないということだ。

したがって、いかにこちらの思い通り「防護計画」の幹の部分を見抜くのだ。

また、原発周辺の不審者のチェック態勢を検証することも極めて重要だ。

原発への潜入や攻撃の前には、偵察者が必要周辺に存在する。それを漏らすことなく見つけ出すシステムになっているかどうかである。

原発敷地の周りに流れる人々や車両をマークする。時間をかけて毎日観察することで、変化抽出を行い、普段と違う人や車をピックアップする。

セキュリティシステムには、不審者というアルゴリズムを解析し、それを探知するハイテクのシステムもあるが、人間の経験値は膨大だ。偵察行動を経験した者なら原発を偵察している者に何かを感じる。

攻撃とは、偵察に引き続き、潜入することからはじまっている。そして潜入とは、相手のセンサーを利用して、モニターしている人間の脳をいかに機能させなくするかということなのである。よって、どんなに敏感なセンサーが出現しようと、いかに多様なものを

りに陽動を計画させるかが防御の根幹をなし、逆に相手が悪いもつかない陽動を仕掛けるのが攻撃の要となる。

現在の「原発テロ対策」訓練を見て私が感じるのは、ノルマのための訓練、という臭いだ。防護能力を高めることより優先されているのは「訓練をした」という既成事実をつくることであり、真剣さを感じない。少しでも真剣さがあれば二つの大きな問題に気付くはずだ。

まず、シナリオの問題である。訓練には段階があり、初期のシナリオならば、テロリストの実態や軍事を知らないシステムの技術屋さんが作っても大した問題ではない。しかし、そこからステップアップして、より現実的なものに移行するためには、攻撃は一体どうやって行われるのかを理解している者が必要となってくる。

もうひとつは、防護員の機動能力の問題である。山際・海際にある原発付近を行動するには、山地機動能力と水中機動能力が必要不可欠だ。「潜入感知するセンサー」ができようと、潜入する方法は必ずある。

例えば、モニター室の警備員をバックにさせようとすれば、多数設置してあるセンサーを同時に誤作動させ、暗夜でも昼間のように見えるカメラにストロボを照射する。そうすると、ストロボの後ろは見えなくなるため、警備員は何とか他の手段でストロボの後ろの状況を確認しようとするだろう。人を派遣するかもしれない。鼻の利く犬は、臭いものには近づけないし、臭いもの後ろにある臭いをかき分ける事はできないのと同じである。そうやって、センサーの弱点も人の弱点も見えてくる。要するに、訓練として偵察・攻撃をしてみれば、前記した三つのポイントが見えてくるわけである。

これら三つのチェックで、必ずや弱点と欠点がわかる。わかったのなら、まず「防護計画」の欠陥を補う仕事にとりかかる。改善を行うのだ。

防護員の弱点については、全員をすくには強化できない。よって二週間の



田中慎弥
これからは
どうだ

芥川賞受賞作家、初のエッセイ集

西日本新聞社 出版部
TEL 092-711-5523
http://shop.nishinippon.co.jp/

特殊なトレーニングを警備会社に提示

し、協議の上、訓練を開始する。この間にインストラクター要員も同時に養成するので、そのインストラクターの監督のもとで訓練を継続する。その後、定期的にチェックすることが重要だ。

さらに半年後、検証を行う。訓練者には宿題を与えているのでそれがなされているかをチェックするのだ。

そしてさらに、実際に偵察を試みて、新しい防護の「穴」を探す。並行してインストラクター要員もさらに強化する。これを繰り返すことで相当なレベルに達するし、インストラクターの経験が可能になってゆく。

「防護装備品」の改善については、個人用の防護品はともかく、実は、セキュリティセンサーとは、いくら発達しても、潜入側から言えば、痛くもかゆくもない。センサーがあるからこそ、潜入は簡単となる——前述したように、それが真実である。

せば、これらがまったくなされていない、という現実である。なぜ、「原発テロ対策」は、真剣に考えられていないのか。

私は、電力会社や政府だけの問題ではないと感じている。

そもそも戦後、この国では、安全に対して、真剣に考える、備える、という習慣がなくなっただけではないか。安全について、本気にならないということが常態化したのではないか。国家、国民も本気のフリをしている——そんな気がしてならない。

私たちは、安全について、真剣に考える習慣をなくしてしまった。漠然とわかっていながら、そこへ思考をも

蟻地獄 を作れ

では、セキュリティシステムは無駄なのか？
答えはノーだ。

私もしアドバイスを求められれば、護る側もセキュリティセンサーを利用することを勧めます。

完全に潜入させないことを追求することは無意味だし、どうやったとしても潜入される可能性は残る。

そこで考えるべきは、護る側が蟻地獄を作っておくことである。そこへ潜入者を誘引するのだ。

例えば、監視カメラの一部を、わざと死角を作るように配置しておく。すると、潜入してくる偵察のプロフェッショナルは、そこをセキュリティの「穴」と判断する。

そこを突いてくる潜入者に、ライトをあてる。潜入者は、ライトの動きに沿って、その陰に隠れてさらに進むだろう。もうこの段階では、潜入者は、

ついでゆくことを避けている。

ゆえに、その発想の根拠から変えなければ「原発テロ対策」が、真剣に考えられていない、状態が続くことになる。

「原発テロ」に備えるには

では何を考えるのか——。
私は三つの提案をしたい。

①覚悟。対処するリミットを決心すること。

想定外という言葉がはやっているが、実は、誰も想定の外を決めていない。

例えば、三十メートル以上の津波が

護る側の意のままにコントロールされているのである。これが誘引という手法だ。そしてその先には、蟻地獄が待ち構えている。

人間の警戒がもつとも緩むのは、相手のミスを見つけた、と思った瞬間だ。そう判断すると、ノーガードで突っ込む。だから、護る側は、ミスしたふりをする。その先には、逃げることでできない蟻地獄、つまりキルゾーンが待ち構えているのだ。

この手法は、兵法の神機と言われている孫子が、水は高きを避け、低きに趨く。兵は実を避け、虚を撃つ。——つまり、強きを避け、弱きを挫くべきと説いているが、それを逆手にとって利用するのだ。易きに流れるという愚直な姿こそ、愚かな人間の姿なのだ。 「原発防護」においてはこの発想のもと、自分の中にキルゾーンを作り、必ずそこへ誘引するシステムを作っておくことが重要となるわけである。

ここまで述べてきたことは、裏を返来るといって想定はなかったという。しかし、それは、三十メートル以上の津波が発生しないということではなく、三十メートル以上の津波が来たらあきらめるということなのだ。その腹をきちんと決めていなかったのが問題なのである。

つまり重要なのは、リミットのラインを決め、それを超えれば被害が起きることを覚悟を持って予想する——その思考なのだ。

日本人には、安全に対する覚悟の習慣がない。ラインを切っただけから、その先をはじめ真剣に考える。薄々分かっているはずなのに真剣に考えず、覚悟のラインを引こうとしない。

覚悟、決心とは、なにかを捨てることでもあるのだ。

人間はすべてに対応はできない。できることとできないことをあらかじめ冷静に見極め、決心し、覚悟しておく——それが危機管理の要諦だと私は思う。

②マインドセット。事象が起きた瞬間、非常時と認識した瞬間の思考の切り替え。

マインドセットには、三種類がある。一つはグリーン（平時）。二つ目はイエロー（事故発生の予兆時）。三つ目は、レッド（事象が起きている状態）。

いくら防災訓練をやっている、マインドの切り替えがなければ、意味はない。

阪神淡路大震災発生直後、当時の首相は、スケジュール通りに経済関係会議を行っていた——その姿こそ、マインドセットがなされなかったこと象徴で、対応が遅れる要因となったのである。

非常時には、法律を守ることによ

てほとんど不都合が発生する。

ゆえに、非常時を考えるのなら、非常時へと切り替える決断が求められる。ここから非常時であり、超法規的な考え方も時には必要となることを覚悟する瞬間でもあるのだ。

③オーダーリミット。上に立つものは、誰にでもオーダー（命令）を行っていいわけではない。直近の部下に方針を示し、任せなければならぬ。

例えば、大隊長は中隊長にオーダーしてもいいが、それを飛び越えて、小隊長に命じてはならない。現場にいない大隊長は現場が見えていない。修羅場では、情報は現場に留まり、上がってくる報告は少ない。そういった状況では、間違ったオーダーを行う危険性があるため、だまって任せることが肝要だ。

また、報告させてもいけない。実況放送しながらボクシングはできないのだ。

菅直人前首相も、福島第一原子力発電所の吉田昌郎前所長に、直接電話

し、オーダーし、報告を求めたと伝え

られている。気持ちにはわかるが、絶対にやってはならないことだ。リーダーとしては、現場指揮官の吉田所長の判断に任せる覚悟が必要だった。

さらに言えば、オーダーリミットの状況を作り上げる訓練が必要だ。それを行ってこそ、安全を、真剣に考えることに繋がるのである。

原子力発電所のセキュリティの弱点には、日本の危機管理の弱点がすべて集約されている。

そしてそれは、真剣に考える習慣の欠如につながる。

日本を取り巻く安全保障の情勢は常に変わるだろう。しかし、「原発テロ」を企図する意思は決してなくなり、その意思は巧みに隠され、継続されている。

これまで述べてきたとおり、日本の「原発テロ対策」は余りにも脆弱であり、潜入者は簡単に攻撃を実行できる。だからこそ、私はもう一度言いたい。

「フリをやめて、真剣になれ！」

ゴルフは、200ヤードから600ヤード先の小さな穴に向かって、3〜5打でボールを打ち、入れ込む、驚異のスポーツである。穴の直径は108ミリ。セントアンドリュースで、手近にあった土管を使った結果、サイズが決まったそうだ。この小さな穴に向けて費やされる執念や集中力は、たいしたものである。

銀行の元事務Kさんは、ティーショット

ゴルフ

力が抜けたらOK?

更家悠介

（サラヤ株式会社社長）



トで振り上げたまま、クラブがなかなか降りてこない。上空で5秒ほど停止が続き、苦悶の表情を振り切るようにようやく動き出す。いわゆるティーショット・

クラブは、200ヤードから600ヤード先の小さな穴に向かって、3〜5打でボールを打ち、入れ込む、驚異のスポーツである。穴の直径は108ミリ。セントアンドリュースで、手近にあった土管を使った結果、サイズが決まったそうだ。この小さな穴に向けて費やされる執念や集中力は、たいしたものである。

まさに、集中力が凝り固まって、筋肉に悪影響を与えているのである。

我が身はどうかというところ、そこまでのゴルフは無いとしても、どうもホールが目の前になると、飛ばしてやろうとか、乗せてやろうとか、思いが強くなりすぎて、力が入りすぎる。ご多分に洩れず、というところなのだが、気合いを入れる程に筋肉の制御がきかなくなるのが

最大の欠点だ。今はハンディキャップ14。この欠点が無ければ、シングルになつていた筈である。

今年4月に、関西の名門・ジャパネットモリアルで、同クラブオーナーのOさん、小金井C代表取締役のWさん、宮崎の学校法人理事長のKさんなど、昔青年会でわいわいと騒いだ方々とゴルフをする機会があった。私は今年の前

半、アフリカに行ったり、アメリカに行ったりと海外出張が多くて、ゴルフと少し疎遠になっていたもので、まず「最近ゴルフに疎遠で」と言い訳から入ったのだが、不思議に力が抜けて、予想に反してドライバーはまっすぐ、アイアンで2オン、バッテリーもいい転がり度2パット、

しばらく印刷とおりのスコアが続いた。すぐに「ゴルフをしないなんて嘘だらう」と激しい叱責を浴びたが、蛙の面に小便。これに反して、小金井のWさんのスコアがいまひとつなのを見て、私は少し調子に乗って、少し握りませんかなどと誘いをかけた。ゴルフはまことにメンタルスポーツで、この小さな心理の線がすぐに仇となり、その次のホールから、Wさんは見違えるようなゴルフで、印刷とおりのスコアが増え、私は逆に力が入ってきて、徐々にペースが乱れ、最後にはOBを連発する始末。またまた未熟な面を見せてしまった。「心頭滅却すれば、火もまた涼し！」という諺があるが、まだまだ、ゴルフの上達への道は遠いようである。